

第4〜6章において鍼灸部門が中心となる傾向はあるものの、湯液部門の知見を可能な限り交えながら中国伝統医学全般における陰陽五行説の意義について論述しようとする著者の姿勢は高く評価すべきである。著者の専門分野のためか記述はより詳しく、問題点も比較的少ない。しかし、例えば第5章で「子午流注逐日按时定穴の歌」の作者を南斉の徐文伯とするものなどにやはり典拠の問題を残している(163頁)。また第4章の5(117〜119頁)において『傷寒』『金匱』は陰陽説が主で、五行説は付足しのような記述が見られる。これは我國の湯液家に多く見られる見解でもあるが、「陰陽五行説を見直す」との方針であるならば多少とも異なる視点からの論及がなされても良かったのではなからうか。後漢以降、中国人の思考において陰陽と五行は表裏一体の関係にあり、陰陽と言えば文字面での有無を問わず必ず五行を含意し、その逆もまた然りという状態であった。本書にはないが、『傷寒』『金匱』の五行的記述は後世の竄入であるとする説は陰陽五行思想史的には成立に困難を伴う。後代の理性から見ると陰陽五行説には理解し難い部分が確かに存在する。だからと言ってそれを排除することは性急に過ぎはしまいか。五行的記述が存在することで『傷寒』『金匱』の価値が減ずることは皆無である。陰陽説に限定することなく、陰陽五行説全般の視点から『傷寒』『金匱』の理解が必要と考えるものである。

些か本稿の主題から外れてしまったので話を本書に戻せば、上述のような長所と短所を併せ持つ書であることを理解

して読むならば、陰陽五行説に関する概説書として中国伝統医学関係者のみならず、広く陰陽五行思想に興味を抱く人々にとっても十分に有益な書であるに違いない。

(林 克)

〔葉業時報社・東京都千代田区神田神保町二一三六北神ビル、  
電話〇三―三二六五―七七五―、一九九一年七月一〇日発行、  
A5判、全二九七ページ、定価三九八〇円〕

中原泉 訳

『人体構造論抄―ヴェサリウスの the Epitome―』

これは、ヴェサリウスの有名な解剖書(通称 *Fabrica*)の彼自身によるダイジェスト版(通称 *Epitome*)を、部分訳した本である。凡例には、英訳版を参考にしつつも「可及的に原文のラテン語に則して訳した」とある。なぜ副題に敢えて英語の定冠詞 *the* を添えたのであろうか。訳者は日本歯科大学で本学会評議員である。昨一九九三年が *Fabrica* と *Epitome* の初版刊行四五〇周年だったことから、それを記念し、ヴェサリウスを顕彰するという意図をもって、この訳書を出版されたようである。原典の目次や内容なども紹介したいところであるが、字数制限のため割愛し、以下、この訳書を忌憚なく批評させて戴く。

率直に言って、本書には初歩的な誤訳が多い。例えば、「瞼の靨帯」(二四頁)、「頭の気管」(二一頁)、歯は上下とも「たい

てい「一本」(二一頁)とあるのは、それぞれ「脛の軟骨」「気管の頭」「最多の場合で「一本」の単純な誤訳である。ほかにも例えば、「筋肉の腱は一種の腱膜であり」(二七頁)、「示指を支えている手根骨」(二四頁)、「小指の前に位置する足の骨の長さの中ほど」(二九頁)、「そのあとにつづく腸の部分をおわれは空腸と呼ぶが、腸や回腸ともいわれる」(三四頁)、肺動脈弁や大動脈弁は「血液が肺へ戻らないようにする」(四五頁)、角膜は「角のように透明である」(五一頁)、「脛はいくら軟骨質であり、脛板と呼ばれる」(六六頁)などは、日本語として支離滅裂であるが、いずれも初歩的な誤訳である(字数の制約上、正訳は割愛せざるを得ない)。同様な箇所は枚挙に暇がない。

しかも、踵骨と距骨、胃と食道、肋骨と肋間、膝蓋と膝窩、脳の軟膜と硬膜、精管と精巣動静脈、腸間膜と腹膜を取り違えたり(一四・二二・二三・二八・四九・五九・六〇頁)、内果・外果を「踝の内側」「踝の外側」と訳したり(三一頁)、腹(部)のことを数カ所で、なぜか「横隔膜」と訳したり(二三頁)、原文にありもしない、手の指を動かす二五番目の筋肉が堂々と訳文に現れていたり(二六頁)、五対の腰椎神経(叢)が一五対もあるかのように記されていたり(五三頁)するなど、間違いが散見される。さらに、前置詞 *sub* を前後の文脈を考慮せずにはば機械的に「くへと」と訳したり、「すなわち」「換言すれば」と訳すべき場合が多い接続詞 *aut* や *vel* をほぼ機械的に「または」と訳すなど、ずさんな訳文も目立つ。

訳文がとりわけ混乱しているのが、六五〜六九頁である。ここはヴェサリウスが人体各部の呼称についてラテン語の原意を踏まえて解説した部分なので、邦訳には相当の工夫が必要であるが、ほとんど、翻訳に名を借りた作文に終始している。訳者の翻訳の力に、評者は疑問を禁じ得ない。こういうありさまでは、ラテン語の *fabrica* を「構造」と訳すことは非や、現代の概念とは若干のずれがある *arteria* や *vena* や *nervus* の訳語のあり方など、核心的な問題について訳者に見解を求めたり、原典の欄外にあるギリシャ語について解説を求めたりしても、おそらく無駄であろう。

原典は四五〇年も前の文献であり、確かに古代のガレノス医学の誤りをそのまま踏襲した部分もあるが、人体解剖学の基礎を据えた偉業と讃えられる *Fabrica* のダイジェスト版だけあって、脈管系の部分以外は、現代の医学部で解剖学のサブテキストとして用いることも十分可能なほど、概して正確な知見が示されている。したがって原則的には、訳文を読んで意味が判然としない箇所は、誤訳と疑ったほうがよい。原文を知らずに本書の訳文だけを読んだ読者が、*Epitome* を荒唐無稽な書と誤解しては困るので、この点は力説しておく。小品とはいえ人体解剖学の古典なのだから、ラテン語の習熟に加え、十分に人体解剖を体験し現代の解剖書を丹念に参照した者でなければ、ヴェサリウスの真意を斟酌したうえで的確な翻訳など、おぼつかないであろう。さらに、訳者の解説にもある通り、*Epitome* は単なる *Fabrica* の抜粋ではな

く、résuméという意図をもって独自に編纂された書物」(xiii頁)である。したがって、*Epitome* を的確に翻訳するためには、*Fabrica* の詳しい記述を是非とも参照する必要があるが、訳文から判断する限り、その努力の跡は見られない。

訳文中に挿入された短い注釈は比較的よく整備されているが、訳者解説には、誤りや不備が散見される。例えば、*Epitome* の独・蘭・英訳の存在は指摘されているが、重要な仏訳(一五六九年刊行)の存在には触れていない。*Fabrica* と *Epitome* の判型は同じとあるが、実際は後者のほうがかなり大きい。両書に共通ないわゆる「神経人」の図は、別の版本からではなく同一の版木から刷られた。*Epitome* の特色のひとつとして、教育上の画期的な工夫である剪型解剖図を含んでいることを指摘できるが、その点の解説がない。

出版元は、医学書・ラテン語書では定評のある、老舗の南江堂である。同社がなぜ、このように問題の多い本を出版したのか、評者は理解に苦しんでいる。

(近藤均)

〔株式会社南江堂、東京都文京区本郷三―四二一六、電話〇三一三八―一七二三六、一九九四年四月刊、B五判、九六頁、四二〇〇円〕

鶴見大学図書館

『特定テーマ別蔵書目録集成4―漢方と泰西医学』

本書はタイトルの示すとおり、鶴見大学図書館(横浜市鶴見区)の蔵書目録の一つで、テーマ別の第4集として「古医書」を対象に編まれたものである。

はじめに柳澤慧二歯学部長の「古医書目録」刊行にあたって」という序文があり、ついで本学会評議員でもある戸出一郎歯学部非常勤講師の「古医学芳蹟」と題する収録医書の解説がある。戸出氏のこの解説は短文ながらきわめて要を尽くしており、これによって収録貴重書の大抵が知れる。その経緯については左記のようにある。

「鶴見大学に古医書が蒐集されたのは、本学に歯学部が創設された一九七〇年以後のことで、当時、新設歯学部の図書購入に当られた故今川与曹先生が、書肆を通じて某蒐集家から三二〇点の古医書を購入されたことに始まる。これらの古医書は書誌学・医史学の両面から見て質の高いもので、思わぬ掘出物に関係者の喜びは大きかった。

その後、このコレクションを核として各時代における善本を増補し、今日までに総数四六五点になったので、この度目録を編纂して発表することとなった。」

凡例によると、本目録の収載範囲は、日本および中国・朝鮮で、主として江戸時代(一部西洋医学書は明治時代に及ぶ)ま